

# 地域がつなぐ「その人らしい暮らし」

## ～ 地・医・専による「本当の包括ケア」の追究 ～

キーワード； ①肩書のない住民 ②専門職  
③医は仁術

小規模多機能アイリーフ八幡の里

発表者； 菊地 知美

共同研究者； 榊原 隆司

### 【はじめに】

「制度・サービスが介入したら地域との関係性が切れてしまった」という事例を耳にする。「やっと、あのお婆ちゃんのところにも“福祉”が関わるようになった。これで安心…」ということであろう。困ったことに、その「安心」は要援護者に対する「関心」を奪い取ってしまうようである。

制度・サービスの供給側が、そのことを得心していなければ、いくら『地域密着』を唱えても、関われば関わるほど「地縁」は遠いものとなってしまふ。その結果、「要援護者への支援は、サービス供給元である事業所の責任において完結すべき」という偏見を生み出すことになる。

制度・サービス利用者が、「地域の支え合い」から排除されないためにも、『本当の包括ケア』の実践が課題となる。

### 【「家がいい」を拒むもの】

Hさんご夫妻は、共に認知症である。今年の初夏、居宅ケアマネより紹介を受けるが、主治医は「この認知症の夫婦においては、在宅生活はあり得ない。早急に入居型の施設へ入れるべき！」として、当事業所の介入に抗議。ご本人らは「家がいい」という欲求を当然のことながら主張するが、「当人たちにもしものことがあったら誰が責任をとるのか？」と主治医も譲らない。

「責任の所在を明確にするため書面に一筆書いて頂きたい」と穏やかではない議論に発展したが、「責任は、ウチ（八幡の里）がとる！」とし、主治医の座を降りて頂くことに…。

「家がいい」…当然の生活欲求を支援するために私たちは「医師」と対峙した。

### 【医は仁術】

連泊中の利用者への往診を受けて頂いている医師へ、前記の「顛末」を相談。

「あのねえ。責任っていったって…死ぬときは、死ぬの。しょうがないの。本人の“暮らし”を医者が決めるなんて出来ないし、やっちゃいけないことなの。大丈夫、僕が看るから」と、私たちのドロドロとした悩みは爽やかに受け入れられた。

### 【「…になっても」を擁護するもの】

ご本人の「これまで」を受容し、「これから」を育んでいくために、区ボランティアセンターより「生活支援ボランティア」を派遣調整。

また、ご主人を八幡の里で。奥様を他の事業所でという具合に、支援を二分することで関わりの隙間を狭くした。地域包括支援センター、民生委員と日常への関わりについて役割を分担。徘徊癖のあるご主人には、最寄派出所のお巡りさんからも指導・助言を頂いた。また、ご夫婦御用達のタクシー会社とも話を合わせて、徘徊対策を講じている。

「家がいい」とは、この事例に限らず、誰もが願うことである。その当然の願いを私たち『介護のプロ』は、「わがまま」として埋没させてはいないか？他人の人生をこちらの価値観で左右してはいないか？本人の了解のないところで、「本人のため」として支援策を講じているという事実があまりにも多すぎる。

「認知症になったら」の対策を『介護予防』というが、これと併せて、「認知症になっても」を擁護する『包括ケア』の実践を広めていくことを求めるべきではないか。